

## 神の母聖マリア

2017.1.1

民数記 6・22-27

ルカ 2・16-21

新年 明けましておめでとうございます。

2017年の元旦、こうしてわたしたちは何はさておきわたしたちの心の実家である高円寺教会の聖堂に集い、共に祈りをささげることが出来ることに感謝したいと思います。この年の初めにわたしたちがささげる祈りの全てを、神の母である聖母がその御心のうちに納めてくださり、この祈りをささげるわたしたち一人一人ひとりにその慈しみの御目をとめてくださって、わたしたち一人ひとりの願いをその御心の中で思い巡らし、そうすることによって、わたしたちの願い求めを清めてくださるように祈りたいと思います。

毎年の年の初めの1月1日は、神の母聖マリアの祭日であり、世界平和の日と定められています。わたしたちを取り巻く世界の現状にあって、この地上に生きるわたしたちが神の母である聖母に願い求めるべき最も根源的な願いは、世界の平和であり、そこに生きる全ての人にとっての平和です。そして、わたしたちが平和を求めるなら、その願いを託するのに最もふさわしい方は、神の母であり、わたしたちの母である聖母マリアです。

クリスマスを祝った降誕節の喜びの中で、わたしたちは新年を迎えています。降誕節の聖母は、御子イエスをその胸に抱かれた聖母です。そのお姿こそ、わたしたちがこの地上で味わうことが出来る平和のありかを示しています。幼子を抱く母親と、その胸に抱かれて無心に眠る幼子の姿こそ、わたしたちが立ち戻るべき平和のシンボルであり、何にもまして守り抜くべき平和そのものです。むき出しの国家権力の衝突としての悲惨な戦争の中で、戦場に駆り出されて行った多くの兵士たちは、後に残した母と子を守るために、無残にもそのいのちを戦場に散らしていったのです。どんなにか生きて、その母と子のもとに戻りたかったことでしょうか。全身で抱きしめることが出来る平和そのもののもとに戻りたかったことでしょうか。その母と子の無事のみを願って、彼らは自分のいのちを犠牲にしたのです。このようなことが世界中のどこであっても、二度と繰り返されてはならないのです。幼子イエスを胸に抱く母マリアは、人間の愚かさが生み出す、今もなお世界の各地で絶えることない武力衝突の犠牲となった母と子の悲痛な叫びを、決して奪われてはならない至福の平和の姿をもって、わたしたちに訴えています。

この正月、日本各地の神社やお寺は初詣の人々で賑わっています。テレビに映し出される、そのような華やいだ正月の風景の中に、今わたしたちの国が享受している平和の姿が示されているように思えます。ますます厳しさを増してゆく社会情勢の中であって、この一年の無事と安全を願う人々の心は、人間本来の姿を取り戻しているように思えます。熾烈な生存競争の只中に身を置く日々の中であって、自分たちが求める幸せが、他の人々を利用し、踏み付けにしなければ手に入らない現実を生きながらも、初詣で祈る人々は、決してそのようにしなければ手に入れることの出来ない幸せを祈っているのではありません。神仏のご加護によって与えられる幸せを祈っているのです。たとえ、それが他の多くの人々の犠牲の上に立って手に入れることが出来る幸せであっても、決して、直接にそのことを願って、他の人を出し抜いて、幸せになることを願っているのではありません。その証拠に、自分たちの幸せを願って初詣に向かう人々の列には、あれほどの混雑の中にあっても、他の人々を押しよける荒々しい殺気のようなものは感じられません。自分たちの幸せを願って、真剣に手を合わせる人々の心には、自分が求める幸せを他の人の幸せと比べて、幸不幸の度合いを測る邪念は感じられません。一心に自分たちの幸せだけを願って、手を合わせることによって、あれほどの押し合いへし合いの雑踏の中で、新年の平和の雰囲気醸し出されているのです。それだけでも、初詣を訪れる全ての人々は等しく善男善女になれているのです。

経済と政治の力だけに支配されている世俗化されたわたしたちの社会の中にあって、毎年繰り広げられるこのような新年の光景は、わたしたちの国に古くから伝えられている精神文化の大切さを改めて考えさせます。わたしたちの世界が平和であるためには、わたしたちが願う幸せを、人間であるわたしたちの営みを越えたところに願い求めるべきなのです。わたしたちの幸せを、人間に過ぎない者たちの目先だけの計算や計画に基づく経済や政治の力に委ねきってしまってはならないのです。頭を垂れ手を合わせて祈ることを忘れた殺気だった幸せの追求は、一部の人々の幸せを実現できるかも知れないけれども、その一部の人々の幸せのための、多くの人々の不幸を生み出す結果になることを、いやと言うほどわたしたちは知っているはずです。それが現実だとうそぶいて、わたしたちは、自分が求める幸せのために、人間としての心を置き去りにして、多くの人々の不幸を生み出し、それを固定化しようとしてきたのではないのでしょうか。その結果が生み出した社会全体のひずみの中で、わたしたちの耳を覆い、目を背けたくなる、人間として生きることが出来なくなるまでに追い詰められた人々の悲惨な現実が、一見平和に見えるわたしたちの国においても、いたるところに噴出しています。あえてわたしたちの目を地球上に住む全ての

人々の現実に向ける勇気を持つことが出来るなら、その現実の悲惨に苦しむ人々の数の多さと、そのむごたらしさに圧倒されて、わたしたちの善意の心はたちどころに萎えてしまいます。そのような人々の現実を前にわたしたちの目を背け、耳を覆わなければわたしたちは自分たちの幸せを祈ることができなくなっています。しかし、そのようわたしたちの祈りは、はたして神に届くのでしょうか。このようなわたしたちの世界を覆う絶望的な状況の中で、わたしたちは祈るべき神を見失ってしまう危機に直面しているのです。このような世界にあって、なお人間は神を信じる事が出来るのかという、誘惑に曝されているのです。

今日の第一朗読の民数記は神が旧約の祭司たちに託された祝福のことばを伝えています。「主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように」。

人間であるわたしたちが顔を背けたくなるような人間社会の悲惨に果たして神はそのみ顔を向けてくださるのでしょうか。この間に肯定の答えを与える神からの確証を、わたしたちはこのクリスマスにいただいたのです。わたしたち人間が作り出す社会がいかに人間の悲惨に覆われていようとも、神はその御子をその世界に生み出すことによって、この人間社会の一員となられたその御子のゆえに、このわたしたちの世界から、そのみ顔を背けることはなさない。これがキリスト者としてわたしたちが、負いがたい苦しみを背負いつつも幸せを願って生きる、この世界の全ての人の中で証すべきわたしたちの信仰です。そのためにも、この新年にあたって、この涙の谷である世界に住むわたしたちは、平和の君である御子イエスを胸に抱く神の母に目をあげ、嘆きながら、泣きながらもひたすらに、御子がもたらされる、全ての人願いが満たされることによって、初めてこの世界に実現する平和を願い求めたいと思います。新たな年を迎えても変わる事のない、涙の谷のこの世界の現実の中に身を置きつつも、その涙を振り払って、神の母、聖マリアの御心に結ばれて、言い尽くせない苦しみのうちにある全ての兄弟のために、神の祝福を祈りたいと思います。主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように。この祈りが、わたしたちの新年に当たっての今日のミサの祈りとなりますように。そのために、わたしたちはこの新しい年の初めの日に、クリスマスの夜の羊飼いたちのように、このわたしたちの世界の現実の中にお生まれになった神の御子とその神の御子をわたしたちの手に抱かせてくださる神の母の御許に集っているのです。ここでわたしたちが信仰のうちに味わう平

和が、わたしたちを通してこの世界の現実を生きる全ての人に広がってゆくよう、神の母であり、この涙の谷に生きる全ての人々の母である聖母に願い祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高